

あわれむべき“感情的”反対論

数年前、月刊誌「現代」で、“明日の教育を考える会”が、「新・幼児教育宣言」を発表したその中で、「幼児期における文字教育の重要性は、まだ十分に一般の人たちにわかっていない。一般の人どころではない。わが国の教育に責任をもっているはずの、文部省にもわかっていないのである。(中略)そして、幼稚園における文字教育に対して、なぜか感情的な反撥さえ感じられる」と述べ、さらに、「奇妙なのは、素人でもちょっと考えれば、その欠陥がすぐわかるような“調査研究”が、文字教育反対の唯一の学術的根拠に使われている、という事実である」と決めつけている。正にその通りである。

このように、根拠にならぬ“調査研究”を唯一の反対の根拠としているということは、結局、「反対すべき根拠が全くない」ということを表明しているようなものである。このような、“感情的”とも思われるような反対

をしている人々に対しては、私は憎しみよりも、その頑迷さに憐れみを覚える。ただただ、先入的固定観念から解き放たれる日のあることを、神に祈るのみである。